主旋律

街　しきりに廣告楽隊を放ちながら　とどかく陽春へ人らうとする
時計店がカフエーに　呉服屋が蓄音器店に　街の咲いては委む風貌
板塀に蝟集する廣告　野からは古自轉車ばかりがやつてくる
誘はれて街へでる　街には客のとぼしい店ばかり
逢つた　同業者だ　春の嘘ばかりいつて消えてしまふ
品切れが高級品を買はせる　この彩色にある煙草店　etc.

十銭店　ころころとほがらかに一点へながれる白銅
食へるだけの仕事をとつてゐて　ネクタイの流行色などの会話
緑く街路を擦過するバスの朱い（朱くとない）唇は場末から来た
歳出の主旋律――××費　すぐ夕刊は包紙となる
競馬なんか見たことがない　（銀貨が紙幣に化る興奮なんか！）
そこここにカフエーを配して　夜を早く寝る街の小唄音楽

スクラム

私服　との対話――そこのところは喫煙してゐる
招喚状を受けとる　は久しく　から来る！
へ来た　並列する制帽と佩剣　向ふは白い壁
警察と裁判所と検事局のスクラムだ　街に聳える
街はづれは監獄　高く赤煉瓦　それをすら囲む商店
きまつて與党を大勝さす　この小都市が故郷だ

後記

▼本書は私の第五作品集であつて「解明を行く」（大正十四年）「新陽」（昭和三年）「煙突」（昭和四年）「都市計畫」（昭和七年）といふ系列に来る。

▼本書へは、昭和七年四月以降、全十一年三月までに各誌へ発表したものばかりを收輯した。この期間には尚「短歌研究」「日本短歌」その他八誌（掲載したものが十三篇百二十三首あり）他に、例へば本書へ收めた「蜘蛛とのろ監房」などは百二十首に及ぶ群作中三十首のみを抜抄したものであるが、この種未発表のものの少くとも二三百首を超えるであらう。それらと、掲載誌の逸散した分をのぞいて、丁度一千首を、年代逆に配列した。

▼本書では少しも意識的な編輯をこころみることなく、すべて発表当時のままとし、各表題と全部を存置した。

▼作品集としてこの方法は甚だ不利なのであるが、かつて私は私の歩いた足跡を赤裸にふりかへり、種々の検討を加へてみたいと考へてゐる。

▼第一に素材の範囲、第二に方法の種類、第三に年言数等について、極めて詳細の反省を、それと一千首分の何程といふ統計的に記録してみたいのである。

▼本書には、五十首以上の長篇が五、二十首以上が三篇、十首以上は二十数個にも達して、これまでの私の作品集とは自ら異つた景観を示してゐる。

▼これら群作の可否、またその前後にある単作との関係などについて、自乗してみたいのである。また更に大規模の設計へと進みたい。

▼さて本書の作品年代に、新短歌はいかなる動向を示してか、新短歌に於けるポエジー運動はその一つの頂点をえがき、「分る分らない」の問題を惹起しつつ、一部は何とのそと意味しないやうな、不可解・奇怪の観念建築をこたらしたのである。私はこの趨勢に賛しなかつたし、また再出発をなしたプロレタリア短歌の素朴な定型的傾向を排して来た。そこに本来の歌魂的立場があるであらう。

▼かく云へば、ひとり本書の作品のみでなく、新短歌大衆はおよそこの線上にあるとの指摘を受けるであらう。そして本書が、それらの中に占めるであらう位置は評者の清鑑をまつことにしたい。

▼新短歌の分野は、雄劣の小派が整理されたやうである。すでに各誌はそれぞれの歴史的個性を有して来た。かくてその上に最近「新短歌クラブ」の結成をこたらしたことは意義ふかいと思ふ。この新情勢と本書をおくり、更に何らかの新たな歌力をたぎらせたいと念するのである。

▼「短歌建設」は、短歌科となつた。本書は前者の総決算であり、同時に後者の出帆の銅鑼なのである。

〈著　者〉

目　次

十一年……五四首

市政の周辺……11

埠頭の公式……13

鑄造される砲身……14

廻轉椅子……16

十二月の街……17

触れてくる貌……18

十　年……二八七首

暗　　渠……24

秋の距離……26

論　　旨……28

破　　綻……30

日曜日する海岸線……33

北陸線……35

豪　　雨……43

水　　底……45
堂内の思想……48
煙突を覗く……50
近　　況……52
徹　　夜……55
都市の手……58
愛　　情……60
気　　流……63
新鑄の鐘……67
午　　前……68
蜘蛛とゐる監房……69
九　年……三八四首
佛　　像……74
山　　門……82
仕　　事……83
掃　　除……91
日　　曜……101
慰　め　る……102

豚　　児……104
雑　　草……112
出　　動……120
鉄　　列……123
円周と交歓……129
朝……130
微細な文法……132
脱　　帽……133
帯　光　る……134
鋪　　装……137
植　ゑ　る……138
礼　　装……140
民族の拳……141
八　年……一五四首
眺　　望……143
季節小品……146
境　　界……147
市長改選……148

電圧不足……150
小さな死……152
見馴れぬ果実……155
停戦前後……156
車窓……158
雑草の面積……160
疾走……161
旧友……164
新しい心臓……165
机上品種々……166
銃声……169
忽忙……171
菊と煙突……172
七年……一二一首
都市の性格……174
空地……177
街のセット……179
白く黒く……181

白い幾何学……183
最近……184
新芽……186
入金簿……188
投影……189
生活小品……190
返信……193
快適な面積……194
主旋律……196
スクラム……198

合計……一千首

掲載要項

短歌建設……奈良……七三〇
短歌科……〃……四一一
短歌研究……東京……八一一
日本短歌……〃……三〇三
白銀……福島……二二〇
短歌月刊……東京……二〇二
立像……〃……一五一
曠野……鳥取……一一〇

月刊歌集……東京……一〇
詩歌……〃……九
歌壇新報……〃……六
啄木研究……大阪……六
街頭風景……富山……五
西陵短歌……長崎……五
短歌紀元……函館……五
近代短歌……大阪……五

自昭和七年四月　至十一年二月

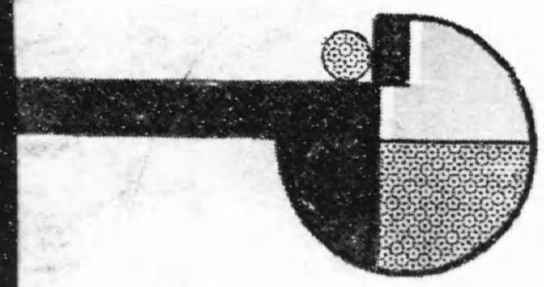
朝刊

一円

昭和十一年三月十日印刷
昭和十一年三月廿日発行　初版

著作兼発行者　奈良市紀寺東口町七七八番地　清水信義

印刷所　奈良市紀寺東口町七七八番地　奈良プリント社　振替大阪六九四九七番

発行所　奈良市紀寺東口町七七八番地　生活社　振替大阪五二九三九番

終